



海外交流

ベトナム、タイにおける留学生と共同研究の誘致活動報告

若 宮 直 紀*

Report on activities of promotion of international collaborative research
and international students

Key Words : international collaborative research, international student, Thailand, Vietnam

1. はじめに

大阪大学(以降、本学)は、「地域に生き世界に伸びる」のキャッチフレーズのもと、2005年10月現在、47校との大学間学術交流協定、178校との部局間学術交流協定を締結し、また、アメリカとオランダに設置された海外拠点事務所、マヒドン大学(タイ)などに設置された共同研究拠点などを通じ、留学生の派遣・受入、および国際共同研究プロジェクトを推進している(関 達治:生産と技術57巻2号, 宮本 和久:生産と技術57巻4号など)。

本学基礎工学部国際交流委員会委員として、2004年の成功を受け引き続き本学主幹で2005年11月に開催された第2回ベトナム・日本学生科学会議、および2005年9月にハノイにて開催された大阪大学フォーラム2005にタイミングをあわせ、2005年9月29日(木)~10月5日(水)にわたり、ベトナム、タイにおいて4つの大学を訪問し、留学生の勧誘および共同研究の誘致を行った。紙面をお借りして本活動について紹介したい。

2. スケジュール

週末を含む現地5日間で2カ国4大学を訪問した。



*Naoki WAKAMIYA

1971年1月生

平成8年3月大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程修了

現在、大阪大学大学院情報科学研究科情報ネットワーク学専攻、助教授、博士(工学)、情報ネットワーク

TEL 06-6879-4541

FAX 06-6879-4544

E-mail: wakamiya@ist.osaka-u.ac.jp

9月30日(金)

ベトナム・ホーチミン市、ホーチミン市工科大学
(Ho Chi Minh City University of Technology)

ベトナム・ホーチミン市、ノンラム大学
(Nong Lam University)

10月3日(月)

タイ・バンコク市、カセサート大学
(Kasetsart University)

10月4日(火)

タイ・バンコク市、チュラロンコン大学
(Chulalongkorn University)

3. ホーチミン市工科大学

情報科学部を訪問し、Tru Hoang Cao 副学部長、Nam Thoai 副学部長にお会いした。ホーチミン市工科大学(図1)は、11学部、900名の教員、23,000名の学生を擁する大組織であり、2002年、2004年のABU ロボコン優勝校でもある。諸外国との交流に積極的に取り組んでいるとのことで、特に、歴史的な経緯から、フランスの大学教員による集中講義など活発な学術交流が行われている。

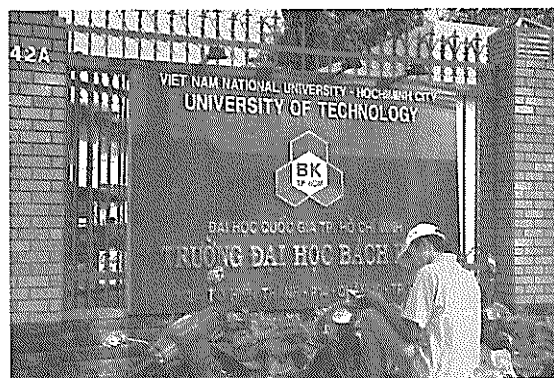


図1: ホーチミン市工科大学

4. ノンラム大学

担当者の尽力の甲斐あって60名近くの学生が参加する大規模なセミナーとなった(図2)。ノンラム大学は東南アジアの豊かな自然環境を背景とした農学が中心の大学であり、キャンパス内を牛が散策している(図3)。

参加学生からは、留学の手段、方法や金銭サポートなどについて質問があった。本学ではOUSEPP(大阪大学短期留学特別プログラム)などの留学生受入プログラムを実施しているが、学術交流協定を締結している大学に制限されているため、それ以外の大学の場合には、残念ながら狭き門である政府の奨学金制度などに頼らなければならない。

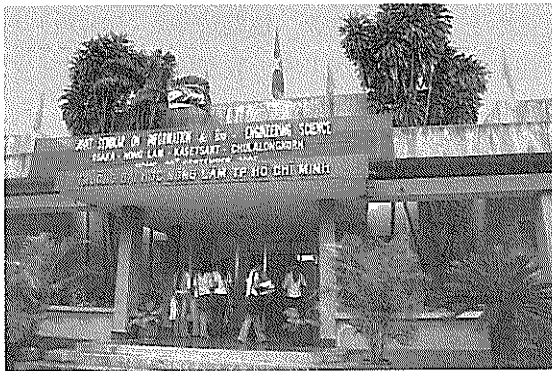


図2：ノンラム大学セミナー会場



図3：ノンラム大学キャンパスを散策する牛

5. カセサート大学

カセサート大学は1943年に農業省によって設立された公立大学で、本学と同等の2,150名の教員に対し、7つのキャンパスに約3倍の36,500名の学部生、1.5倍近い10,400名の大学院生が在籍する。カセサート

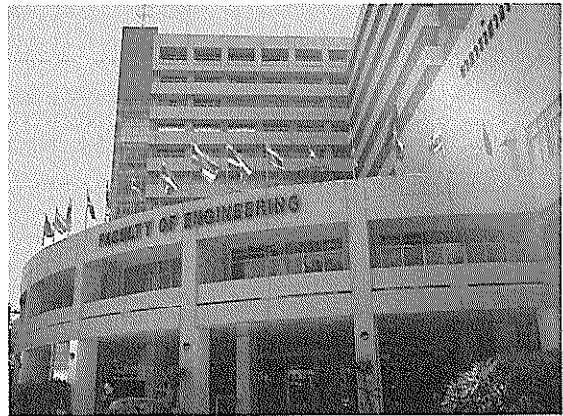


図4：カセサート大学工学部

大学工学部(図4)とは本学工学部との間で部局間学術交流協定が結ばれている。工学部には650名の学生が所属しているが、その卒業生の25%は企業や政府に就職し、25%が自ら起業するそうである。

渡航時期はタイの大学の期末試験期間にあたったため、期末試験が終了する夕方までは工学部計算機科学科の教員を対象に互いの研究紹介および共同研究プログラムを案内し(図5)、その後、学生を対象とした留学生制度の紹介を行った。前半ではPirawat Watanapongse学科長、Somnuk Keretho先進情報技術研究所所長を含む15名の教員に参加いただき、私の専門と研究分野に近いこともあり活発な議論となった。特に情報通信分野では非常に関連性の高い研究を行っていることが分かり、今後の情報交換を約束した。また、企画中の第1回タイ学生科学会議への協力をあわせて要請した。ベトナム学生科学会議と同様、タイ学生科学会議は、日本国内のタイからの留学生が中心となって組織、運営され、留学生間の交流、情報交換、研究発表の場となる予定である。



図5：カセサート大学での教員説明会

6. チュラロンコン大学

チュラロンコン大学は1917年にラマ6世(ワチラット王)によって創立されたタイで最も古く最も美しい大学であり、タイの小学生の遠足先にもなっている(図6)。なお、大学名である「チュラロンコン」はタイ近代国家の礎を築いたラマ5世チュラロンコン王にちなむ。バンコク市中心部に位置するキャンパスの近隣一帯の土地は全て大学のもので、借地料をとっており、近々値上げの予定だそうである。

訪問先の理学部化学科の78名の教員のうち46名が25歳～40歳と大変若い。期末試験期間中のため学生の参加者は少なかったが、ご対応頂いたBoosayarat Tomopatanaget先生から、奨学金制度、共同研究プロジェクトなどによる留学生受入に関する質問を受けた。文部科学省、タイ、あるいは企業の奨学金制度を利用するか、博士後期課程学生であれば共同研究プロジェクトで雇用するなどの可能性があるかと回答した。チュラロンコン大学と本学は大学間学術交流協定のもと、特に授業料免除の取り決めがなされ



図6：チュラロンコン大学

ており、また、前述のOUSEPPによる短期留学も可能であるが、やはり留学に際しては学力、言葉などの問題もさることながら、生活費などの金銭的サポートが最大の課題となるようである。

7. おわりに

週末を含む現地5日間で4大学を訪問するというタイトなスケジュールであったが、それぞれ国、大学ごとに異なる雰囲気を感じることができ、大変興味深い渡航であった。

今回の反省点をいくつか挙げたい。日本への留学を志す学生にとっては、入試、授業、日本語教育に関する情報の提供、受入プログラムの充実も重要であるが、なによりも金銭的サポート、すなわち奨学金の獲得が最大の関心事となる。本学では学術交流協定にもとづく学費免除、短期留学などのプログラムが提供されているが母国、我が国ともに留学生が政府の奨学金を獲得するのは大変困難であり、正規生として留学することは難しい。

また、大学訪問のもうひとつの目的は研究者とのコネクション確立であったが、実際に共同研究を立ち上げるためには双方から具体的な研究テーマ案を提示することが必要であると感じた。共同研究テーマのもとに、種々の国際共同研究の助成費を受けて連携を強めることができ、さらには、部局間、大学間の学術交流協定の締結に繋げることが期待できる。

最後に、本渡航の実施にあたっては、基礎工学部国際交流委員会久保井委員長をはじめ、訪問先との調整に尽力してくださったLe Quoc Tuan, Pakatip Aksharanandana, Pattara Leelaprute, Le Thanh Man Cao各氏のご努力、ご協力によるものである。ここに記して各位に謝意を表したい。

